

3秒後に振り返らせる!

オンナが語る「クールな男」論。2人目の論者は、ダンディズムについて多くの書を著している中野香織さん。ジェントルマンとダンディの通じ合うところと、違うところの考察から始まる。読んで楽しくタメになり、なおかつ鋭い「クールな男」論である。

文=中野香織 Photo: Tsukuru Asada @ Seccession (portrait)

ジェントルマンとダンディ、 違う2つの種属がある。

カッコいい男。見た目も、中身も。そのお手本として、スーツの元祖を生んだ国であるイギリスの「ジェントルマン」あるいは「ダンディ」と呼ばれる男たちに注目が集まることがあります。

すでにスーツを着こなした男をかけたらの皮肉もなしに称えたいとき、そのどちらかの呼称が、意識的に区別されることもなくあてはめられる場合が多いようです。泰然として静かな自信に満ちた風情において共通している彼らは、おそらく男の目から見ても眩惑的で、「ジェントルマン」も「ダンディ」もいっしょくたにされがちです。でも、男のかっこよさの正体を考えるにあたり、彼らの区別を正確につけることは基本と思われまふ。まずはこの2種類の男の違いを知ることから始めましょう。

はじめに「ジェントルマン」ですが、辞書に書いてある説明はかなり不十分で、その実態は奥深すぎて明確な定義をもちません。いやむしろ、明確な定義をもたなかったからこそ、現代にいたるまで生き続けている

理念なのです。

きわめて大雑把にくくってしまうと、ジェントルマン階級とは、支配階級のこと、とも言えます。イギリスの社会と文化は、ジェントルマン階級(Upper)と非ジェントルマン階級(Non-Upper)と漠然と2つに分けられるようなところがあります。もともとは、経済的な実態がある人、すなわち大土地所有者がジェントルマン階級に属しましたが、富と権力を持つ人が野蛮だったら困るわけで、そこに抽象的な理念が加わったのです。支配階級の男にふさわしい理想像、それが「ジェントルマンらしさ」。この理念が、刻々変わる時代背景に応じて読み替えられつつ、今にいたるわけです。

では、たとえば過去において、どういふ資質がジェントルマンらしいとされたのかといえば、王権が強かった17世紀の場合、詩人のリチャード・ブラスウェイトが、次のような資質を列挙しています。「若々しさ。気立てのよさ。立派な職業。遊び。好もしい人付き合い。中庸・節度、そして成熟」。

また、中産階級が続々と支配階級のなかに参入してくる19世紀の中頃になると、この資質も変容し、「謹厳、誠実、努力、質実剛健」といった中産階級の徳目が、ジェントルマンにふさわしい美徳として重きをなしていきます。ほかならぬこの時代の理念が、同時期に完成したスーツとともに世界へ広まり、明治初期の日本にもやってきて定着してしまっただけですね。ちなみに克己勉勵して紳士になりたい人々のバイブルは、サムエル・スマイルズの「セルフ・ヘルプ」でした。「天は自ら助くる者を助く」の言葉で有名な、19世紀版自己啓発書みたいな位置づけられている本です。もっと奥の深い本ですが。

一方の「ダンディ」というのは、やはり支配階級に属する男たちに変わりありませんが、19世紀に登場した彼らは、むしろ主流のジェントルマン理念に抵抗することでその存在を際立たせました。現在、ダンディというのは単におしゃれな男をさすことも多いですが、「おしゃれをする」というそのことじたいが、謹厳に働いて生産活動に励もうという中産階級的な美徳に対する抵抗だったわけです。おしゃれというのは、財産の浪費、時間の空費でもありますからね。2時間もかけてネッククロスの大失敗作の山を作りながら完璧に

装う、というダンディの祖ブランメルは、その思想も運命によって、生産性に価値をおく心的態度を養っていたわけですね。ブランメルは同時に、色彩や装飾を徹底的に排除するという服装術によって、華美も誇示するのがエライという18世紀的な貴族階級の価値も否定しちゃうところが秀逸で、そうして周囲を驚かせながら憧れられ、畏怖されたことによって、神話的高みに上ったのです。

時代が変わり、本流の価値が変われば当然ダンディズムの表現も変わっていきますが、そのエッセンスは常に、主流や伝統的価値に対する、子供じみた、暗にばかばかしさすれすれの抵抗にあると思っています。だからこそ、同時代の賛否両論を引き受けることになる。たとえば「Dandyism.net」というダンディズム愛好家サイトが選んだ昨年の「ダンディ・オブ・ザ・イヤー」は、ルカ・ルビナッチというやや奇抜な服装表現をすることで有名な方だったのですが、彼の装いに対する私の知人たちの反応は、みごとに真二つに分かれました。好きか、嫌いか。どちらかの感情をかき立てずにはおかないのですね。友人の一人は、「彼を見てみると『二代目』という言葉が思い出す。社長の息子、なんていう肩書は、偉くてもろいものなのに」とつぶやきました。偉くてもろい東の間のステータス。そこで挑発的に装ってみせることで伝統的エレガンスに抵抗する、それこそがルビナッチ流のダンディズムなのかもしれません。

いずれにせよ、ダンディズムとは「たかがファッション」の話です。本来、「ほかに考えることややすべきことがたくさんある」ジェントルマンにとっては、おしゃれなどただの遊びの範疇に入るものです。そこで真剣に服装術を追求してしまうというポーズ、それじたいが主流に対する批判ないし抵抗になっていることが、ダンディズムのキモです。実践する服装術においても、マイノリティの立場に立ち、称賛と反発をともに引き受ける潔さがないと、ダンディと呼ばれる資格はありません。

個人的には、ジェントルマンの王道を行きながら、ちらりちらりと反逆精神をうかがわせるダンディズムが香りたつ装いや態度に魅力を感じます。この点において、サー・ウィンストン・チャーチルの流儀は完璧で、



中野香織

エッセイスト/服飾史家/
明治大学国際日本学部特任教授

過去2000年のファッション史から最新モードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーをおこなっている。著書に『モードとエロスと資本』(集英社新書)、『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』(新潮選書)ほか多数。

<http://www.mode.kaori-nakano.com>

彼の装い、態度、表情、なによりも行動と言葉にふれるたびに、惚れ惚れします。

装いにおける

「高貴なる者の義務」の東と西…。

さてそのように、ジェントルマンにしてもダンディにしても、特殊な階級制度をもつイギリスの歴史の文脈のなかで誕生したもので、それに類似した精神価値を日本にあてはめようとしても、無理があります。格差が広がってもそれがヨーロッパのような文化的な階級制度になることはなく、「分厚い中間層の復活」が政府の課題となるような現代日本においては、(嫉妬を買わない)ことが、とりわけ富裕層にとっての最重要課題となっています。だから、彼らは、装いにおける「高貴なる者の義務(ノーブレス・オブリージュ)」(服装の模範を示すこともまた高貴なる者の義務ですね)を果たそうとせずにひっそりと身をひそめ、決して服装が話題となるような装いはしません。

このような文化の違いを受け入れた上で、では、グローバル化が進む時代の変革期たる現代において、どのような男が「カッコいい」男なのか、考えてみましょう。仕事において最高のパフォーマンスを発揮している、勇気と決断力があり誇りをもって闘っている、等々の古今東西の「男道」の基本条件をクリアしていることを大前提として、表層レベルのチェックを通した戯言であることをお許し願いたい。

具体例その1として、CNNのアンダーソン・クーパーが思い浮かびます。誰にも不快感を与えない知的な穏やかさをベースにしながら、クールなモダンティが際立つスーツスタイルを特徴とするキャスターです。外見にはことさら奇をてらったり変化を与えたりする必要もないというジェントルマン的な余裕が、国境を超え万人にアピールする魅力となっています。とてもセクシーな方ですけど、その色気には、理由があります。「中立を期すため、私生活を語らないこと」という秘密主義がその理由です。SNS全盛の時代、誰と会った何を食べたという投稿は、楽しいものではありませんが、とめどない過度の投稿は、その人から神秘を奪います。セクシーさは神秘的な部分にこそ宿ることを思えば、どこかで神秘を保つ努力をすべきという教訓を、この人から学びたいものです。

具体例その2として、ジョニー・デップを挙げたいと思います。個性的、といえば聞こえはいいですが、いつもどこかヘンな着こなしをして現れ、熱狂的な称賛と疑問符を、ともに引き受けています。その意味では彼も一種のダンディですね。笑われるのも織り込み済みという潔さとかサービス精神が感じられ、まさにその「自意識を放棄しちゃってる」感が、愛される理由になっていることを学びたい。

とかく日本の男性は繊細で、学習が好きのためか、服装やマナーにおいて、完璧にセオリー通りに整えがちです。それが趣味なら止めませんが、女の目には退屈に映るし、なによりセクシーではありません。やはりどこかに「ファッションのほかに考えることがたくさんある」という風情を上手に残したスキがあるほう

が、はるかに心を開きやすいものです。

とはいえ、一度、完璧を目指してみないと上手な崩しもわからない、というのも事実。完璧を目指すにしても、スキを作るにしても、忘れてはいけないのは、「さりげなさ」でしょうね。ブランメルは、「作りこんださりげなさ」を究めて、「決して人から振り返られてはいけない」ことを旨としましたが、現代では、それでは物足りない気がします。ユナイテッドアローズのディレクター、鴨志田康人さんが「3秒たってから振り返られるのが理想」と言っていました。その基準は、モダン・ジェントルマンにとって、よいポイントについていると思います。

とりたてて人目をひかない装いなのに、何か違う、とはっとさせられその3秒後に思わず振り返ってしまう。着こなしゆえかもしれないし、目の光だったり、顔の艶であったり、姿勢だったり、気配であったりするかもしれない。そんな「3秒後に振り返らせる男」に、ぜひとも出会いたいと思います。👤

通りで振り返られたら、君の服装は失敗だと思え。



ジョージ・ブライアン・ブランメル

1778-1840 ダンディズムの祖。ジョージ4世の摂政時代に「趣味の裁定者」として社交界に君臨するが、賭博で借金を作り、フランスへ逃亡、養老院で孤独な最期を迎える。現代に続く紳士服の美学の基礎を作る。

地獄を経験しているなら、そのまま突き進め。



サー・ウィンストン・チャーチル

1874-1965 イギリスの政治家。第二次世界大戦で戦時内閣首相として連合軍を勝利に導く。その巨匠でノーベル文学賞受賞。ポルカドットのボウタイがトレードマーク。葉巻、シャンパーニュにも名を残す。

オレは自分がもう大人になっているのかが、確信がない。



ジョニー・デップ

1967- アメリカの映画俳優、ミュージシャン。オフビートとメジャーを両立させる稀有な存在。メガネ、帽子のコレクターでもある。「ファンにサインする際に態度が丁寧な俳優」3年連続1位に輝く。

自分ではない何者かになろうとは思わない。



アンダーソン・クーパー

1967- アメリカのジャーナリスト。CNNの「アンダーソン・クーパー 360°」アンカーマン。3.11の震災直後にも被災地入りしている(原発事故を受けて帰国)。母はデザイナーのクロリア・ヴァンダービルト。